

令和4年度前期企画展

地形からみる 常磐の歴史と文化

—湯の岳、徳一、岩崎氏、常磐の古代・中世の史跡を探る—



『土地分類基本調査 平』福島県 1994、
『土地分類基本調査 川部・小名浜』福島県 1995
の「地形分類図」より

いわき市立いわき総合図書館

いわき市平字田町 120 ラトブ 4・5 階

☎ 0246-22-5552

開催にあたって

いわき市は、昭和 41 年に 14 市町村の大同合併により誕生した
広域市で、旧市町村はそれぞれの歴史と文化を持ち、合併後もそ
の特徴を生かし発展しています。

今回は、市街地再生整備に向けた取り組みが進められている常
磐地区を取り上げます。常磐地区は湯ノ岳と藤原川を中心に独自
の歴史を持ち、様々な文化遺産があります。

その中から平安時代の僧、徳一関係の寺社と、中世に常磐地区
を治めた岩崎氏にまつわる史跡を紹介します。

図書館がまちづくりのためにできることは何かを考え、この企画展
を立案しました。自分の足元にある地域の地理や歴史を深く掘り下
げると、見慣れた風景がより豊かに見えてきます。この展示を見た
後、ラトブから見える湯ノ岳が今までより感慨深いものになることを願
って、開催いたします。

令和4年 6 月

いわき総合図書館



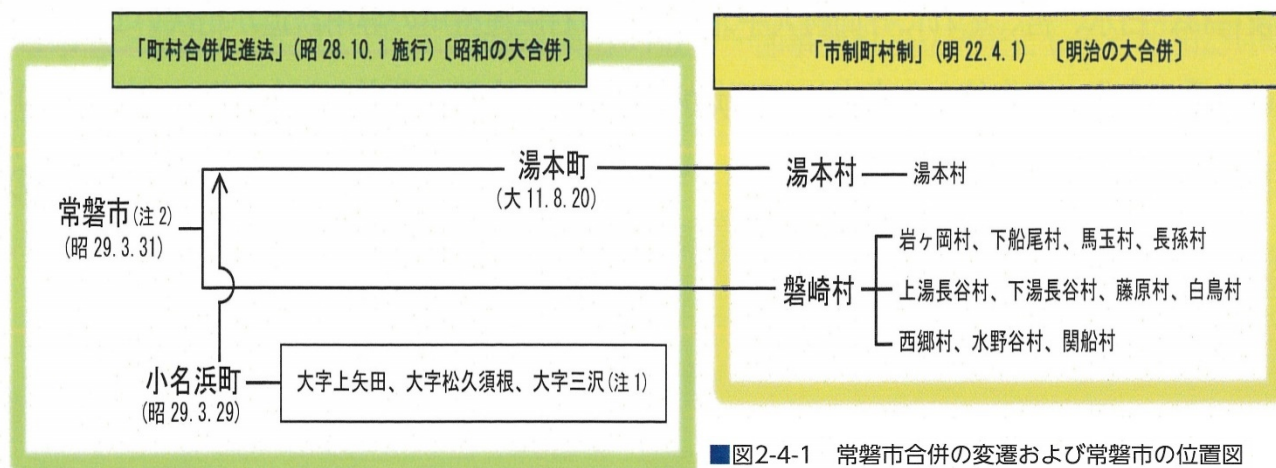
ラトブ 5 階エレベーター前から
見える湯ノ岳（2022 年 6 月撮影）

じょうばん

常磐の由来

「常磐」という文字は、元来、常^{ひたち}陸国と磐^{いわき}城国から一字ずつ採ったもので、茨城県と福島県をまたがる地域を意味し、常磐線や常磐炭礦に使われていた。

昭和29年（1954）、湯本^{ゆもと}町と岩崎^{いわさき}村が合併する際に市名が決まらないため、双方が「常磐炭礦」と深く関わっていることから、その名を採って「常磐市」とした。その結果、広い地域とは別に「常磐地区」という使われ方をするようになった。



■図2-4-1 常磐市合併の変遷および常磐市の位置図

注1) 小名浜町のうち3大字が昭和29年3月29日、分離して湯本町と合併

2) 湯本町と磐崎村が昭和29年3月31日、合併して常磐市

3) 明=明治、大=大正、昭=昭和

『未来へつなぐ「いわき」ものがたり』いわき市 2016 より

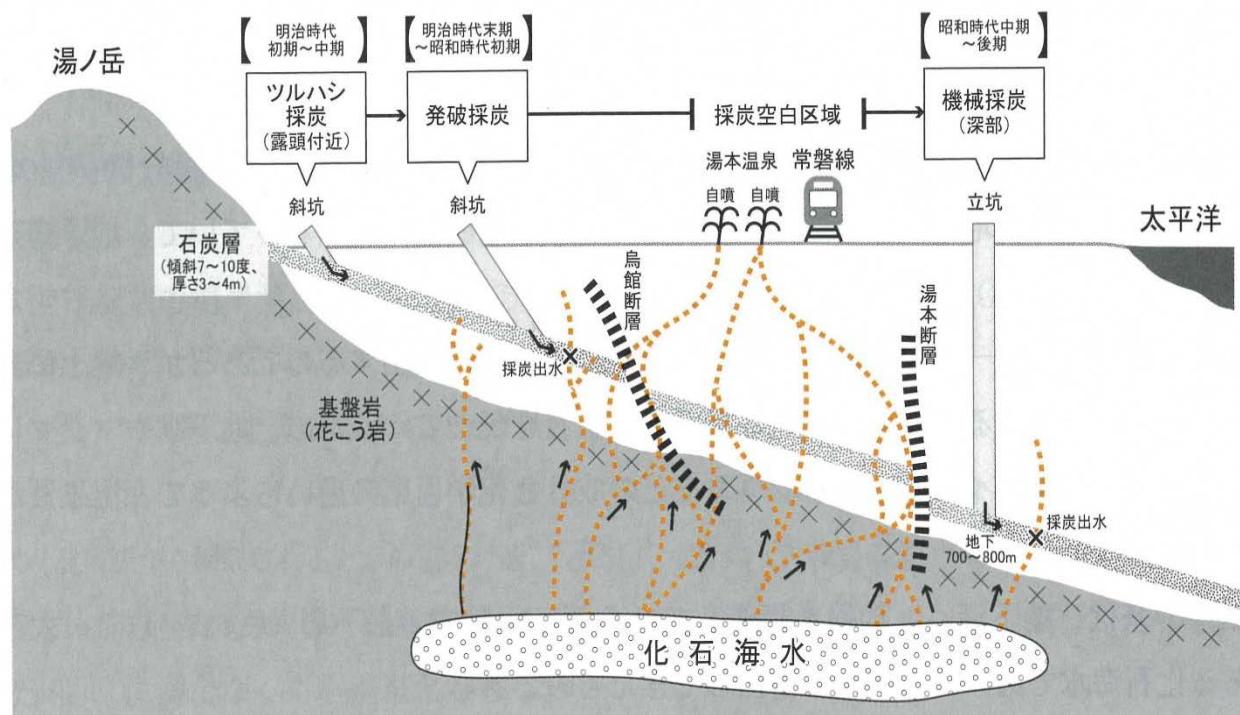
いわきの地形

いわきの地形の特色

いわき市は太平洋に面した阿武隈高地の東側の土地。高地の東には丘陵地や段丘、沖積平野が高度を下げながら分布している。

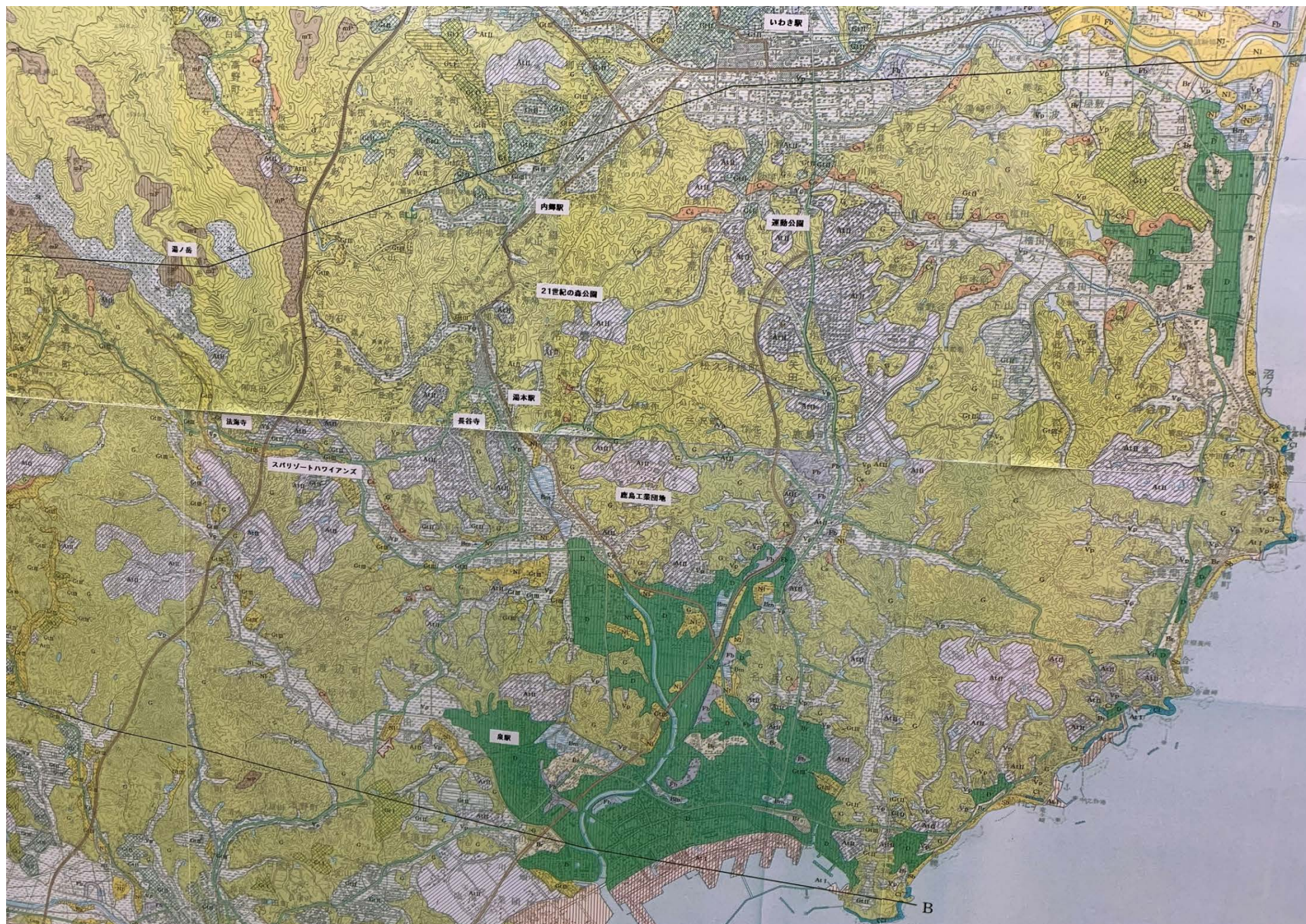
北西－南東方向にのびる二ツ箭断層、赤井断層、湯ノ岳断層等によって地域が分割され、更に地質構造や岩質により、複雑な地形を構成している。

主な河川である夏井川、藤原川、鮫川の沿岸には谷底平野、流域には河岸段丘が分布し、太平洋沿岸地域には海岸段丘、沿岸部には海岸平野が分布し海岸の地形も断層などの影響で岩石海岸と砂浜海岸が交互に連続している。



■図 1-1 湯本市街周辺における温泉と石炭の関係断面図(概念図)

『温泉守って一世紀 いわき市常磐湯本財産区史 (1913～2018)』2018 より



『土地分類基本調査 平』福島県 1994・『土地分類基本調査 川部・小名浜』福島県 1995 の「地形分類図」より

阿武隈高地（あぶくまこうち）

別名・阿武隈山地。宮城県南部から福島県東部を通り、茨城県北東部へ続く山地。南北約 170km，東西幅最大 50km。

面積は福島県のほぼ 3 分の 1 を占める。

過去に 4 回以上の隆起運動によって現在の高さになった隆起準平原。その大部分の岩石は中生代白亜紀の花崗岩。山々の多くは、花崗岩の風化と浸食が進んだために頂上付近がなだらかになった老年期の地形である。



福島県ホームページ「活断層調査成果の概要」(2018 更新)より



図 2-12 市内の断層位置図 『いわき市・東日本大震災の証言と記録』 2013 より

湯ノ岳

いわき市常磐藤原町地内、標高 593.6 メートル。別名、三箱山。

なだらかな山容は常磐地区のシンボルであり、湯本町三函の温泉神社の御神体山、また平安時代の僧徳一に関わる信仰の山として親しまれている。山名の由来は諸説あるが、三箱山は徳一が山頂近くの3つの巨石に仏教で重要な「戒・定・慧」の3つの箱を納めたためと言われ、後に麓から温泉が出たので、湯ノ岳と改めたと伝えられている。

昭和 52 年 (1977)、湯ノ岳パノラマラインとよばれるドライブコースが開通し、中腹の展望台からは太平洋と市内が一望できる。

「スパリゾートハワイアンズ」と「湯ノ岳」

「常磐ハワイアンセンター」は、平成 2 年 3 月 21 日 (水)、「スパリゾートハワイアンズ」と名称を変えた。

「ハワイ」をシンボルとした温浴施設に力を入れたリゾートとしてイメージを一新、シンボルマークも変えた。マークの山影は湯の岳をハワイ・ホノルルから透視した推察山影である。

*正式名称は「湯ノ岳」だが、一般的には「湯の岳」と表記されている。



昭和 41 年 (1966) ~
『翔 夢とロマンを求めて』
常磐興産 2006 より



平成 2 年 (1990) ~
『翔 夢とロマンを求
めて』より



平成 24 年 (2012) ~
『るるぶスパリゾートハワ
イアンズ』2012 より



藤原川

三大明神山にその源を発し、湯ノ岳等の山間を流れ出て、丘陵地の間を流下し、小名浜港を経て太平洋に注ぐ。

流域面積115.1k m²、全長78.5 km の二級河川。

支流は湯長谷川、湯本川、水野谷川、馬渡川、岩崎川、矢田川（2次支流 蔵持川、三沢川、走熊川）、釜戸川（2次支流 死骨川）、宝珠院川と13河川。

中流域では農業用水、下流域では工業用水に利用されている。

近年、災害防止や住宅地開発、工業団地の建設から、治水対策が必要になり、平成17年に策定した「二級河川藤原川水系河川整備基本方針」に基づいて整備が進められている。



いわき市内にある貝塚

「貝塚がある場所から、縄文時代の海岸線がどのあたりだったか知ることができます。」

「みんなで学ぼう いわきの歴史」 いわき市教育委員会
2018 より引用



常磐の歴史と文化

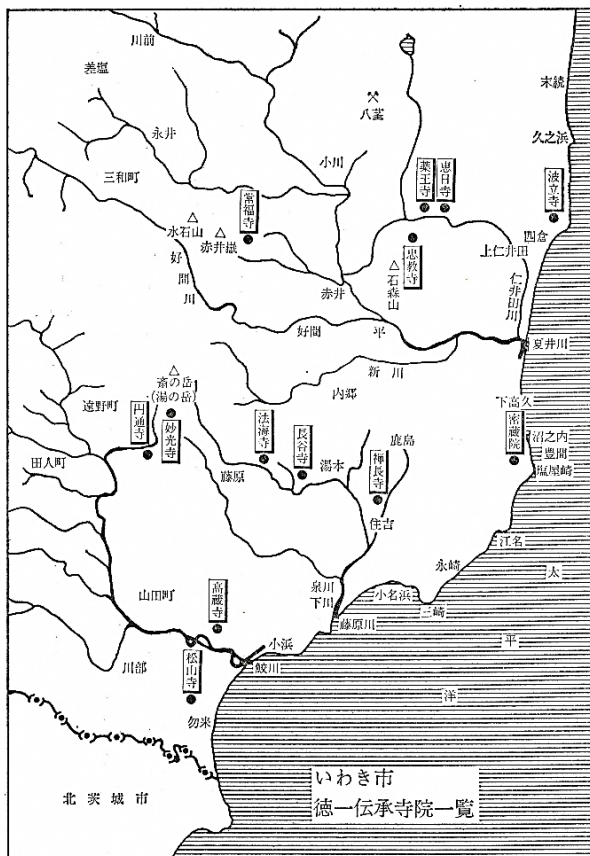
とく いち
徳 一

平安時代初期の僧。福島県の仏教の歴史において僧として登場する最初の人物。奈良で法相宗を学んだ後に東国へ移って会津を拠点とし、筑波山中禅寺、会津磐梯山麓に恵日寺をつくったとされる。空海最澄と論争で知られ、著書に『真言宗未決』『止観論』などがある。いわきでの活躍はすべて伝承であるが、長谷寺の十一面観音の胎内銘（文保2・1318）に「観音堂徳一建立所也」と記されている。



図24 徳一の布教経路推定図

『福島県立博物館紀要 第32号』
「平安時代の山林寺院に表された神仏習合の姿」
荒木隆 2018 より



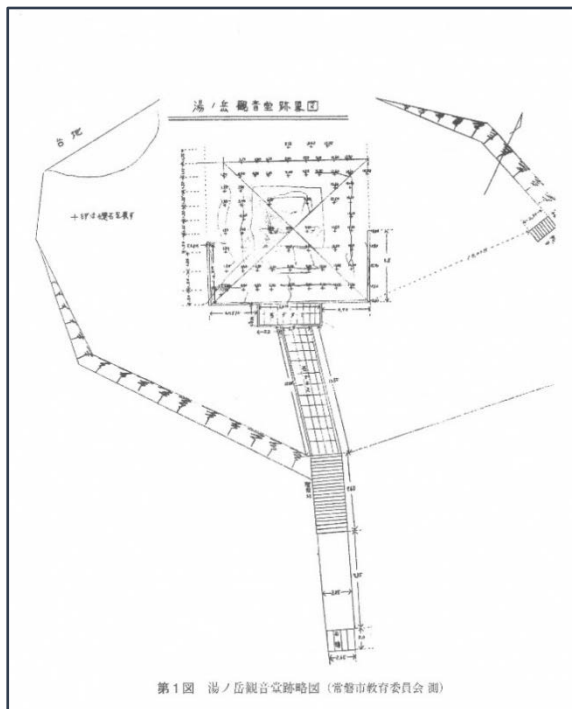
『徳一菩薩』 菊地勇 1982 より



現在の湯ノ岳観音堂（2022年5月撮影）

磐城三十三所観音霊場

徳一は、庶民信仰の一つである「磐城三十三所観音霊場」にも深く関わっている。観音霊場めぐりの観音様は徳一が彫ったとされるものが多い。磐城三十三所観音霊場は、佐渡の沙弥宗永が関東巡礼のみぎり、磐城郡高野に止住し、永正15年(1518)正月10日の夜、杉成観音(関東第一番札所杉本観音)の霊夢によって磐城三十三ヶ所霊場巡りしたのが始まりとされている。



『いわき地方史研究 第55号』
「湯ノ岳観音堂跡・絹谷観音堂跡調査覚書」
渡邊一雄 2018 より



磐城三十三ヶ所観音霊場一覧

	観音堂	第17番	高照観音堂
第1番	北目観音堂	第18番	沼之内観音堂
第2番	天津観音堂	第19番	下大越観音堂
第3番	北郷童堂	第20番	龍沢観音堂
第4番	つるし観音堂	第21番	日吉観音堂
第5番	湯之嶽観音堂	第22番	朝日観音堂
第6番	高蔵観音堂	第23番	石森観音堂
第7番	法田観音堂	第24番	堂の作観音堂
第8番	富澤観音堂	第25番	青瀧観音堂
第9番	佛護山観音堂	第26番	高野坂観音堂
第10番	出蔵観音堂	第27番	苗取観音堂
第11番	関田観音堂	第28番	玉山観音堂
第12番	鮫川観音堂	第29番	小寺山観音堂
第13番	下川天狗堂	第30番	小久観音堂
第14番	笛ヶ森観音堂	第31番	折木観音堂
第15番	柳澤観音堂	第32番	岩下観音堂
第16番	久保中山観音堂	第33番	岩井戸観音堂

法海寺ホームページより

三箱石 (2022年5月撮影)

ほうかいじ 法海寺

三箱山世音院法海寺は、永禄2年(1559)に宥長法印が田場坂に開いたお寺。大同2年(807)、徳一大師が湯ノ岳に自作の十一面観世音菩薩を安置し、開山したと伝えられる湯ノ岳観音の別当寺である。

度重なる火災により、観音像は湯ノ岳から寺内へと移祀され、安政3年(1856)に再建されたが、文久3年(1863)には本堂とともに灰燼に帰した。昭和14年(1939)に観音堂は再建され、鐘楼堂の改築が進められた。

現在、湯ノ岳にある観音堂は平成16年(2004)に建てたものである。



法海寺本堂 (2022年6月撮影)

法海寺梵鐘

市指定有形文化財(工芸品)

延宝9年(1681)、湯長谷藩主遠山政亮の夫人(松代藩主真田信政の長女)は、岩城重隆の再建以来115年を経て、損傷がひどくなった観音堂を大改修した上に、梵鐘を鑄造させ、鐘撞堂を建てて寄進した。梵鐘は、高さ1.32m・径75.5cm・重さ400kg、銘文を刻み観音の歴史を300年余記録した貴重なものである。



法海寺梵鐘 (2022年6月撮影)

欽惟一奥岩崎郡湯嶽三箱山
観音靈堂者大同二年徳一太師
草創之地也雖然永禄年中火災
所難適中一字逢殃火而盡灰燼
矣越前岩城太守左京大夫平朝臣
重隆公感於梵刹之泯而更始敬終
以再復焉同八年乙丑冬修造功成後
守其奉承逮今叱矣自開闢以降
到今歲而曆算八百廿四年矣
時如今遠山主殿頭源朝臣藤原政
亮公依領当郡其高妻真田氏之
裔姉也與二世安樂本願合力而悉
成廢壞之修營加施新鑄洪鐘而以
簡鐘堂焉矣夫鐘者梵刹至要而何
重器依之晨暉夕鳴縑素童女和其
聲應其響則可施化衆業教休也
功徳無量孰不感戴乎也因以
銘曰
為鐘之用 幽顯俱然
斷現世惑 除多却眠
煩腦所覺 菩提既全
信心策志 佛証同遍
遠濟群類 近契正緣
無量功徳 總在此懸
大檀那遠山主殿頭源朝臣藤原政亮
内室
当山法海寺沙門有俊諸記焉
延宝九辛酉年三月廿七日
奉行 真鍋七良左衛門景連
小奉行 小松忠兵衛忠利
冶工 鈴木清左衛門

お山かけ

お山掛け修行は、藤原川の流域で生活を営む地区ごとに自然の恵みに報恩と感謝をささげ、ご本尊様にお供え物をし、祈願法要を修し法海寺より出発、ㄨ帳場にて入水し身を清めて、10の木戸を祈祷して巡るものである。

今で言う登山のようなものだが単なる体力作りや、観光の登山ではなく、あくまでも宗教的な内容に満ちた祈りの登山、観音尊と大自然への恵に感謝する精神修養の行である。

(法海寺ホームページより)



藤原川 川上溪谷不動滝 (2022年6月撮影)



丸山公園の看板 (2022年6月撮影)

は せ でら 長 谷 寺

「神 明 鏡」(南北朝時代に書かれた天皇の年代記・『続群書類従』収録)によれば、長谷寺は平城天皇の願いにより、徳一が大同 2 年(807)に建立したと伝えられる。

今の寺は堀之内館跡で岩崎氏との関わりが深く、御本尊は、文保2年(1318)、岩崎隆義の寄進による、長谷寺に古くから安置されていた長谷式十一面観世音菩薩像の模写図を基に復刻した仏像である。

本堂が野火のために焼失し、延享 2 年(1745)に建てた観音堂を改修して内陣とし、周囲に外陣と向拝を加えて増築して、現在の本堂としている。



長谷寺本堂 (2022 年 6 月撮影)



木造十一面観音立像

県指定重要文化財(彫刻)

像の高さは 172 cm

文保2年(1318)、岩崎隆義が同家の先祖菩提を念じて大仏師能慶をしてカヤ材寄木造りの総丈約 270 cmの檀像を寄進した。

像の胎内・足先の裏面に73字の墨書銘があり、仏教文化と歴史資料の両面から極めて高い評価を受けている。

木造十一面観音立像 (2022 年 6 月撮影)

中世城館跡分布および地名表（福島県いわき市常磐地区・岩崎氏関係）

城館名	所在地	遺構の特色	占地状況	文献等	備考
台ノ山館	常磐湯本町台ノ山	台地	丘陵、台地	飯野文書	湯長谷藩最初の館跡
矢田館	常磐鹿島町上矢田町 中屋敷	複郭、土塁	丘陵の先端		矢田氏か
烏館	常磐上湯長谷町長倉	複郭、石垣	山頂、丘陵	磐城四郡小館記	
湯本館	常磐湯本町三函	郭	丘陵、台地	名越源流志、 飯野文書	若松紀伊守が館主、 惣善寺を開基
関館	常磐関船町土関		丘陵、山頂		
水野谷館	常磐諏訪ヶ崎	梯郭式、堀切、 土塁	山頂、丘陵	磐城四郡小館記	坂本左衛門が館主
三澤館	常磐三沢町日吉下	曲輪、堀切、 掘立柱建物	丘陵		日吉下遺跡
上船尾館	常磐関船町南館、館 下、馬場	連郭、土塁、堀 切、犬走	丘陵、畑地	磐城四郡小館記、 薬王寺門末由緒記	青磁器破片
長谷館	常磐白鳥町館下湯長谷 町古館	空堀、土塁	台地		近世湯長谷藩の館と して使用
下船尾館	常磐下船尾町居作、 中畑、古内	土塁、門、連郭、 堀切		白土文書、 自他門由緒記	修験年行事越多和文 書、宝篋印塔
西郷館	常磐西郷町金山、忠多		小丘陵	磐城四郡小館記	土器
登館	常磐長孫町八幡平	堀切、土塁	丘陵	磐城四郡小館記、 我が郷土磐崎	長孫氏の古墓
島倉館	小名浜字犬吠ほか泉町 本谷字館、堀ノ内数馬	連郭、土塁、犬 走、堀切	山頂、丘陵	磐城四郡小館記	岩崎氏居城

『福島県の中世城館跡』より



徳一建立との胎内銘を持つ
十一面観音像
長谷寺 蔵

『徳一菩薩』高橋富雄
歴史春秋社 2000 より

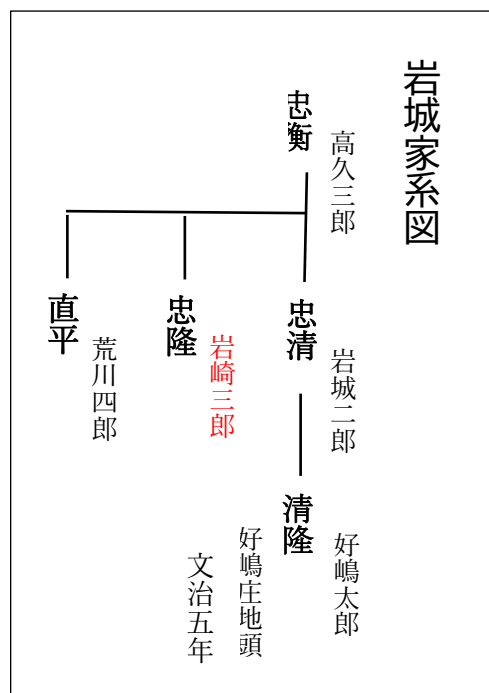
奥州東海道岩崎郡長谷村観音堂徳一大師建立所也
文保貳年 戊 二月十日奉造立始
同年 午 戊 三月十七大願畢

岩崎氏

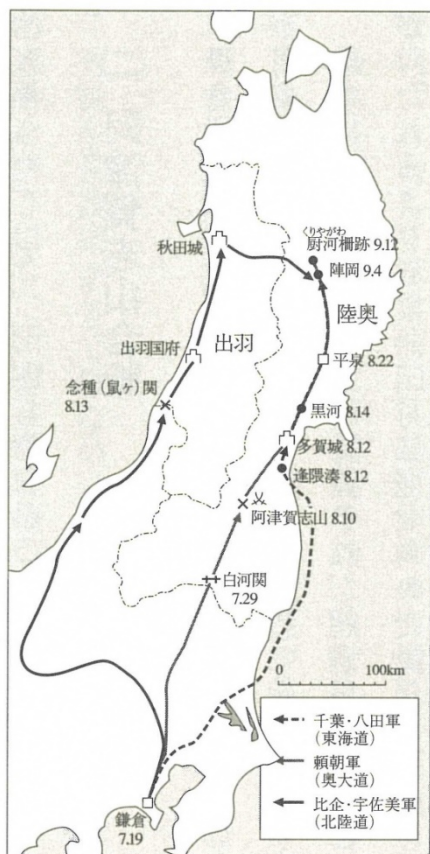
12世紀の半ば頃に岩城氏一族の忠隆が岩崎氏を名乗った。岩崎氏は、岩崎郡を本拠として北は後田・高坂・御厩、東は下矢田・上矢田・久世原、南は関・船尾・金成などの村々に支配を及ぼしていた。

岩城氏は桓武平氏常陸大掾平国香の子孫と言われ平安時代の末に岩城郡に土着し、鎌倉時代初期には岩城郡内の好嶋荘の地頭となった。

室町時代になると、白土城にいた岩城氏の勢力が強くなり、大館に城を移し、一族を統合して戦国大名になった。



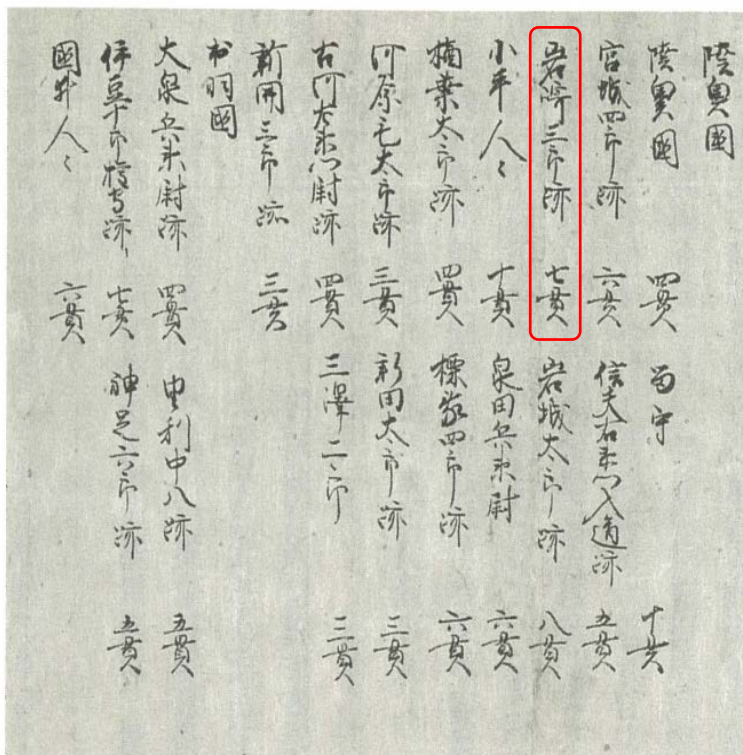
『いわき』歴史春秋出版 2012 より



文治5年奥州合戦における鎌倉勢の進路

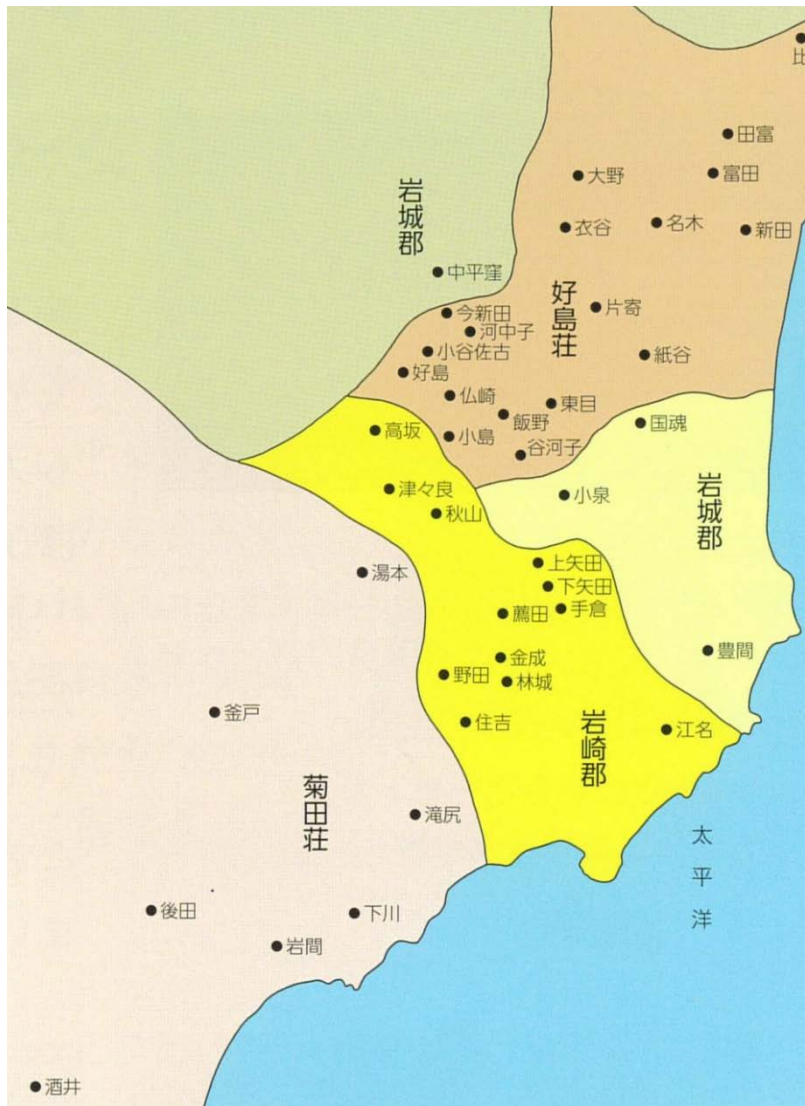
『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』

入間田宣夫 2007 より



六条八幡宮造営注文 (田中穰氏旧蔵典籍古文書 国立歴史民俗博物館蔵)
建治元年(1275)6月27日、鎌倉幕府が御家人らに、京都の六条左女牛に所在した六条八幡宮の造営の際の費用を割りあてた造営注文。その中に陸奥国・出羽国の御家人が列記されている。

『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』より

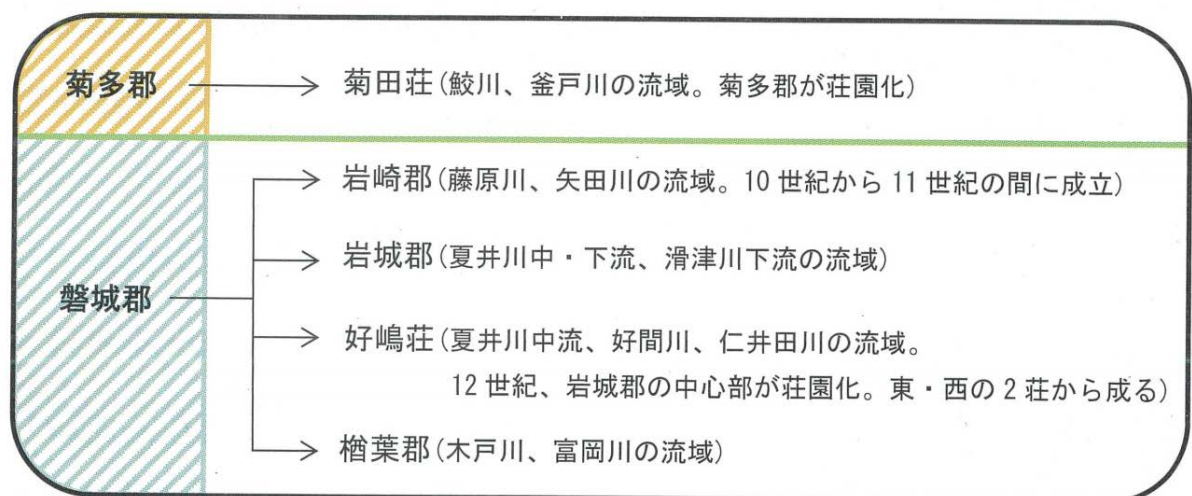


●鎌倉時代の地名

「鎌倉時代にあった郡・荘・村です。」

現在とちがう漢字が使われている地名もあります。」

『みんなで学ぼう いわきの歴史』より引用



■図1-3-3 いわき地方における郡の分離や荘の発祥
『未来へつなぐ「いわき」ものがたり』いわき市 2016 より

関 連 年 表

時代	西 暦	年 号	出 来 事
平 安	807	大同 2 年	徳一、湯ノ岳観音堂を創建。（伝） 徳一、十一面観音を本尊として長谷寺開山。（伝）
鎌 倉 時 代	1189	文治 5 年	源頼朝、奥州平泉の藤原泰衡を討つために鎌倉を進発、東海道軍は千葉常胤を大將軍とし、岩城、岩崎を回り、阿武隈川湊に渡りつく。
	1190	建久 元 年	大河兼任の乱に際し、岩崎氏は先陣として進発することを幕府に申請。
	1253	建長 5 年	岩崎隆泰と岡本親元が岩崎郡金成村をめぐり相論。
	1275	建治 元 年	鎌倉幕府が京都の六条八幡宮造宮の際、御家人に費用を割りあてた文書に「岩崎三郎跡 七貫」とあり。
	1286	弘安 9 年	岡本氏の熊野参詣の際に岩崎隆時は先達を務めた。
	1318	文保 2 年	岩崎隆義、長谷式十一面観世音菩薩像を仏師能慶に模刻させ、長谷寺に寄進。
	1324	正中 元 年	岩崎隆衡、好嶋山をめぐる相論で幕府の遂行使として相論当事者に鎌倉召喚を伝えた。
	1331	元弘 元 年	楠木正成鎮圧の軍勢に岩崎隆衡が編成される。
戦 国 時 代	1532-1555	天文 年間	長谷寺、曹洞宗の寺として再中興開山。
	1559	永禄 2 年	田場坂に宥長が 法海寺を開山。（真言宗） 同じ頃、湯ノ岳観音堂は野火で焼かれた。
	1565	永禄 8 年	岩城重隆、湯ノ岳観音堂を再建。
江 戸 時 代	1648	慶安 元 年	徳川家光より湯ノ岳観音堂に御朱印十石を拝領。 法海寺は湯ノ岳観音堂の別当寺として栄えた。
	1681	延宝 9 年	遠山政亮夫人、湯ノ岳観音堂を大改修。梵鐘と鐘楼堂を寄進し、湯ノ嶽観音の由来を刻む。
	1745	延享 2 年	長谷寺、観音堂を再建。
	1835	天保 6 年	2 度目の火災で湯ノ岳観音堂焼失。
	1856	安政 3 年	法海寺、湯ノ岳観音堂を湯ノ岳から寺の境内に移して再々健。
	1863	文久 3 年	3 度目の火事。法海寺、御本堂とともに湯ノ岳観音堂と鐘楼堂を失う。
明 治	1881	明治 14 年	法海寺、鐘楼堂を再建。
大 正	1825	大正 14 年	長谷寺、観音堂の四囲に廂を下し、本堂に増改築。
昭 和 時 代	1940	昭和 15 年	法海寺、観音堂の再建を期して落慶、入仏。
	1950	昭和 25 年	長谷寺、全面的に改修し、入仏。
	1983	昭和 58 年	長谷寺の観音立像、国宝修理所で解体補修を受ける。

<参考資料>『続群書類従』、『吾妻鑑』、『図説いわきの歴史』、『いわきふるさと大百科』、『いわきのお寺さん』、『長谷寺志』、法海寺のホームページ *湯ノ岳観音堂関係は赤字、長谷寺関係は青字

>>> 関 連 資 料 <<<

○いわきの地形関係

- ◆『阿武隈高地の地形』－自然環境へのアプローチ－ 里見庫男 著 2005 (K/454/サ)
- ◆『あぶくま山地東縁のおい立ち』－郷土の地学－ 柳沢一郎 著
平地学同好会 1957 (KS 三猿/455/ヤ)
- ◆『いわき化石ガイド』 いわき市観光協会 2007 (K/457/イ)
- ◆『いわき市史 第5巻 自然・人文』
いわき市史編さん委員会 編 いわき市 1973 (K/210.1/1/イ)
- ◆『いわき市 S P O T衛星画像図』 N T Tデータ通信 内外地図 2002 (K/291/エ)
- ◆『いわき市・東日本大震災の証言と記録』 いわき市 2013 (K/369/イ)
- ◆『いわきのお宮とお祭り』 『いわきのお宮とお祭り』刊行会 2009 (K/175/イ)
- ◆『いわきの地誌』 いわき地域学会 2016 (K/291/イ/2016)
- ◆『温泉守って一世紀 いわき市常磐湯本財産区史 (1913～2018)』
いわき市常磐湯本財産区 2018 (K/210.6/1/イ)
- ◆『翔 夢とロマンを求めて』－スパリゾートハワイアンズの軌跡 (1966年～2005年)－
常磐興産・レジャーリゾート事業部 2006 (K/689/シ)
- ◆『空から見た私たちのまち いわき市南部』東日本航空写真普及協会 編
マップ・システム・カンパニー 1980 (K/291/リ)
- ◆『土地分類基本調査 平』 福島県農林水産部農地計画課 1994 (K/450/フ)
- ◆『土地分類基本調査 川部・小名浜』 福島県農林水産部農地計画課 1995 (K/450/フ)
- ◆『福島県常磐地区の地盤』(都市地盤調査報告書 第12巻)
建設省計画局 編 大蔵省印刷局 1966 (K/455/フ/)
- ◆『二級河川 藤原川水系河川整備計画』 福島県 2006 (K/517/フ)
- ◆『藤原川水系河川環境管理基本計画』－河川空間管理計画－ 福島県 1995 (K/517/フ)
- ◆『藤原川流域紀行』吉田隆治 編 いわき地域学会出版部 1991 (K/291/フ)
- ◆『未来へつなぐ「いわき」ものがたり』－いわき市市制施行50周年記念誌－
いわき市 2016 (K/318.2/イ)
- ◆『みんなで学ぼう いわきの歴史』 いわき市教育文化事業団 編集
いわき市教育委員会 2018 (K/210.1/1/イ)

○常磐の歴史と文化

- ◆『いわき』 歴史春秋出版 2012 (K/210.1/1/イ)
- ◆『いわき市史 第1巻 原始・古代・中世』 いわき市史編さん委員会 編
いわき市 1986 (K/210.1/1/イ)
- ◆『いわき市の文化財』 いわき市教育委員会 2017 (K/709/イ)
- ◆『いわき地方史研究 第55号』 いわき地方史研究会 2018 (K/210.0/1/イ/55)
*「湯ノ岳観音堂跡・絹谷観音堂跡調査覚書」 渡邊一雄 著
- ◆『いわきの中世を探る』 ー後期 縄張りから見た中世城館跡ー 令和元年度 第2回企画展
いわき市考古資料館 2020 (K/210.4/1/イ)
- ◆『いわきのお寺さん』 今井 速水 著 協和印刷 1991 (K/185/イ)
- ◆『いわきふるさと大百科』 郷土出版社 2007 K/210.1/1/イ)
- ◆『順礼ガイド 磐城三十三所観音霊場』 草野 日出雄 著 はましん 1980 (K/186/ウ)
- ◆『図説 いわきの歴史』 郷土出版社 1999 (K/210.1//1/イ)
- ◆『全譯吾妻鏡 第2巻』 新版 新人物往来社 2011 (210.4/7/2)
- ◆『続群書類従 第29輯 上』 塙 保己一 編 続群書類従完成会 1978 (R/081/ケ/29-1)
*巻第八百五十二上 雑部二 神明鏡上
- ◆『徳一菩薩』 ーよみがえる史上最高の名僧ー 菊地 勇 著
いわきふるさとづくり市民会議 1982 (K/182/キ)
- ◆『徳一菩薩』 ーひと おしえ がくもんー 高橋 富雄 著 歴史春秋出版 2000 (K/185/ト)
- ◆『長谷寺志』 ー宇治山慈光院ー 梅宮 茂 著 長谷寺 1978 (K/188/ウ)
- ◆『福島県立博物館紀要 第32号』 福島県立博物館 2018 (K/069/7/32)
「平安時代の山林寺院に表された神仏習合の姿」ー史跡流廃寺跡の仏堂・社殿遺構から検証するー 荒木隆 著
- ◆『福島県の中世城館跡』 福島県教育委員会 1988 (K/210.2/0/フ)
- ◆『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』 入間田宣夫 著 歴史春秋出版 2007 (K/210.4/0/イ)
- ◆『われらが郷土磐崎 第1輯』 磐崎地区民俗資料保存会 1976 (K/210.1/1/ワ)
- ◆『われらが郷土磐崎 第2輯』 磐崎地区民俗資料保存会 1978 (K/210.1/1/ワ)
- ◆『われらが郷土磐崎 第3輯』 磐崎地区民俗資料保存会 1984 (K/210.1/1/ワ)
- ◆『湯の街 優悠遊 創刊号～161号』 菅原新聞店 2001～2007 (K/291/ユ/1)
- ◆『湯の街 優悠遊 162号～309号』 菅原新聞店 2008～2013 (K/291/ユ/2)
- ◆『湯の街 優悠遊 310号～461号』 菅原新聞店 2014～2020 (K/291/ユ/3)

＊この資料は、いわき総合図書館のホームページで公開しています。
ホームページ右上にある「郷土資料のページ」（お城の櫓の図）→
「企画展示」→「令和4年度」をクリックすると配布資料があり、
印刷することもできます。
今回以外にも平成22年（2010）以降のいわきに関する様々な展示
の配布資料が掲載されています。
地域を調べる際に役立ちますので、ぜひご活用ください。



企画展「地形からみる常磐の歴史と文化」

令和4(2022)年8月10日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館

■会期 令和4(2022)年6月28日(火)－10月16日(日)

■会場 いわき総合図書館 5階 企画展示コーナー